

がん検診のがん医療費に与える 影響に関する一考察

山口 真寛¹⁾ 小川 俊夫²⁾ 八木 正行¹⁾ 埴岡 健一²⁾
武藤 正樹²⁾ 今村 知明³⁾ 喜多村 祐里⁴⁾ 祖父江 友孝⁴⁾

1) 全国健康保険協会 兵庫支部

2) 国際医療福祉大学大学院 医療福祉学研究科

3) 奈良県立医科大学 公衆衛生学教室

4) 大阪大学大学院 医学系研究科社会医学講座

背 景

- がん検診はわが国では市区町村や職域を中心に幅広く提供されているが、その受診率は伸び悩んでおり、さらなるがん検診の受診促進に向けた取り組みが必要である。
- 一方で、がん検診によりがんの早期発見・早期治療と、それによる医療費の適正化が期待されるが、医療費の視点でがんの早期発見・早期治療について検討した既存研究はほとんどないのが現状である。

目 的

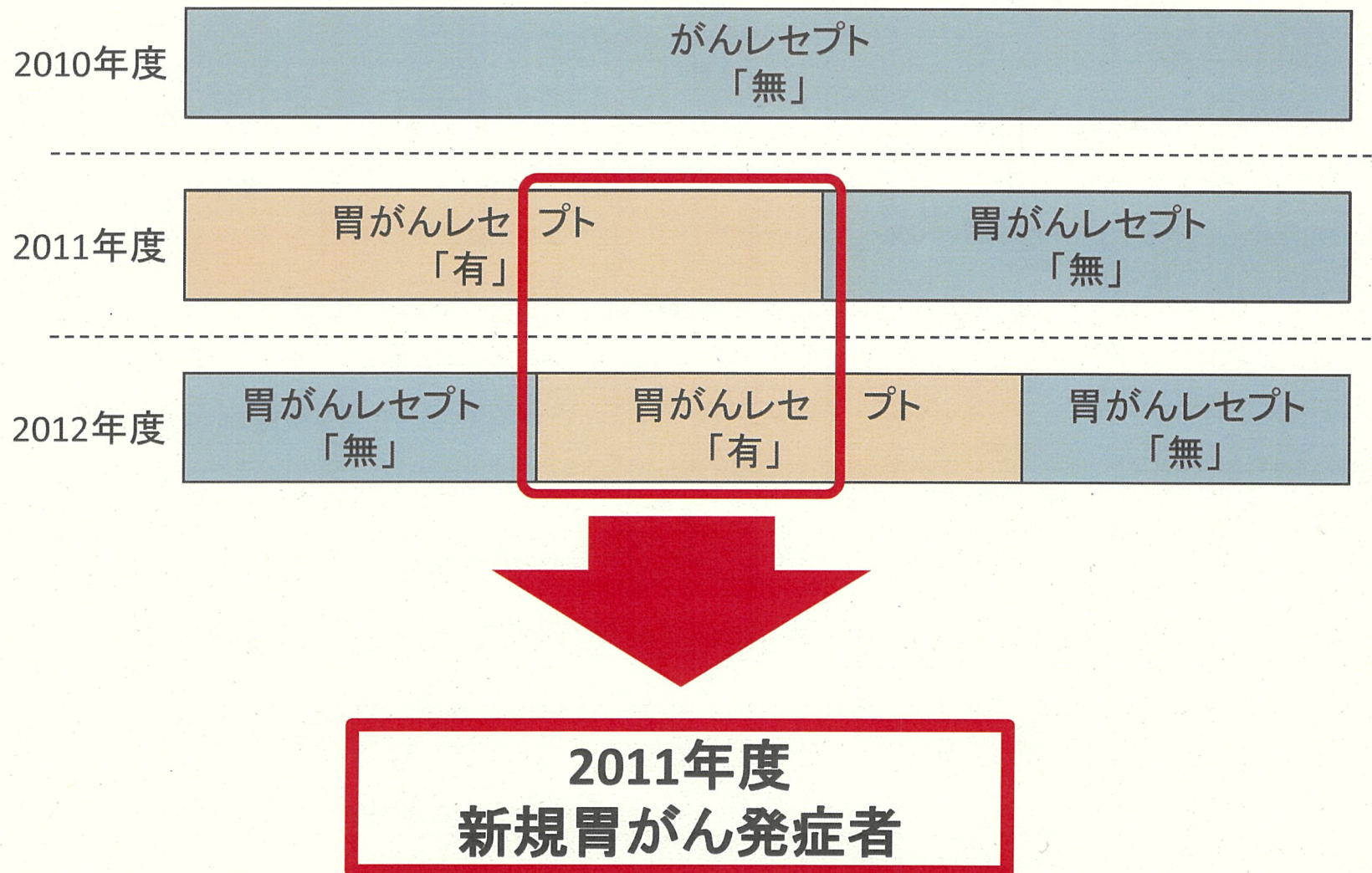
- 本研究は、レセプトを用いてがん検診のがん医療費に与える効果について考察することを目的として実施する。

方 法

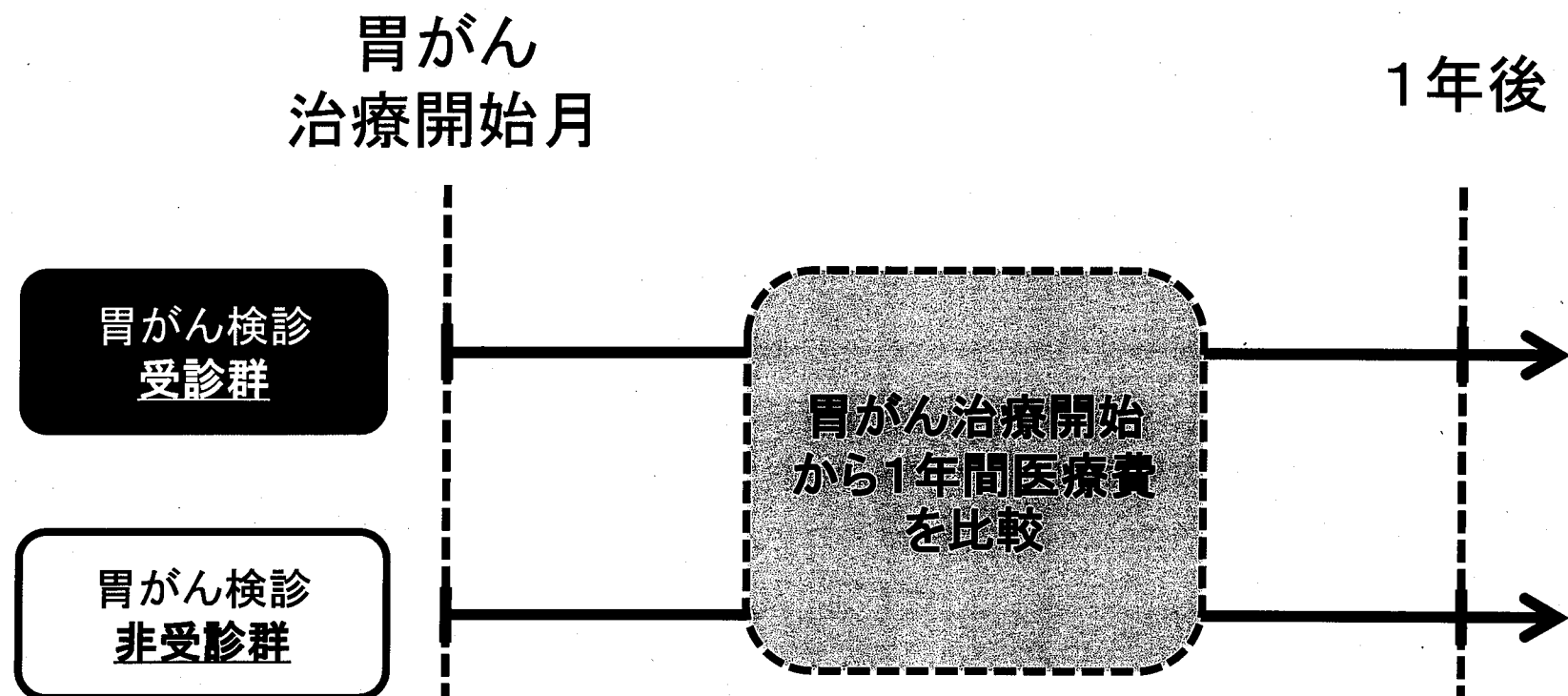
- ✓ 全国健康保険協会(協会けんぽ)兵庫支部の、2011年度末時点で35歳以上の加入者のうち、2010年度にがんレセプトがなく、2011年度及び2012年度の2年連続で主傷病に「胃がん」のレセプトがある者を「新規胃がん発症者」と仮定し抽出した。(胃がん発症者の特定には、レセプトの主傷病名がICD10コード「C16」である場合に胃がんレセプト有とした。)ただし、2011年度中に死亡した者は、2011年度のみ胃がんレセプトがある者を「新規胃がん発症者」とした。
- ✓ 上記の対象者を胃がん検診の受診・非受診で2群に区分し、それぞれの群で胃がん治療開始月から1年間の胃がん医療費及び総医療費を集計し、その平均値を比較した。

※データ処理及び統計解析はSPSSver22を用い、平均値の比較にはt検定を用いた。

方 法



方法



結 果

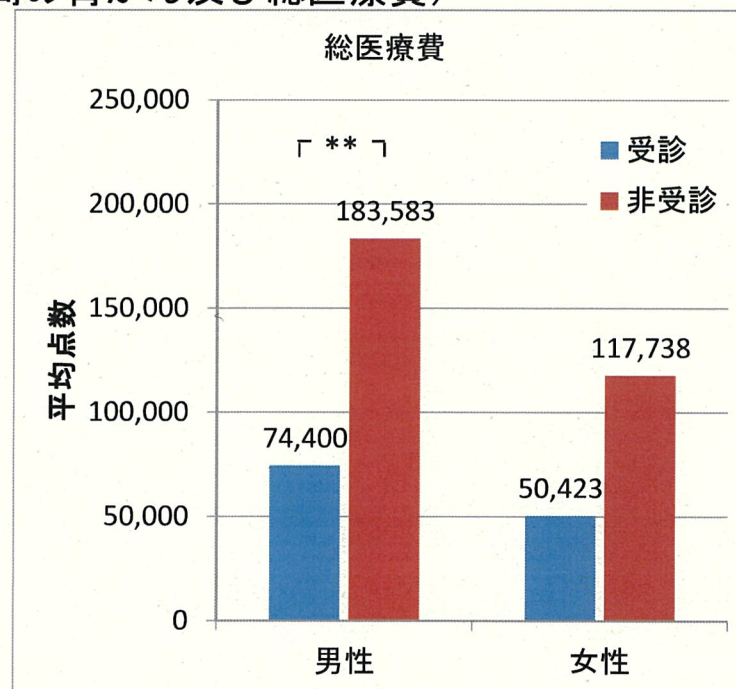
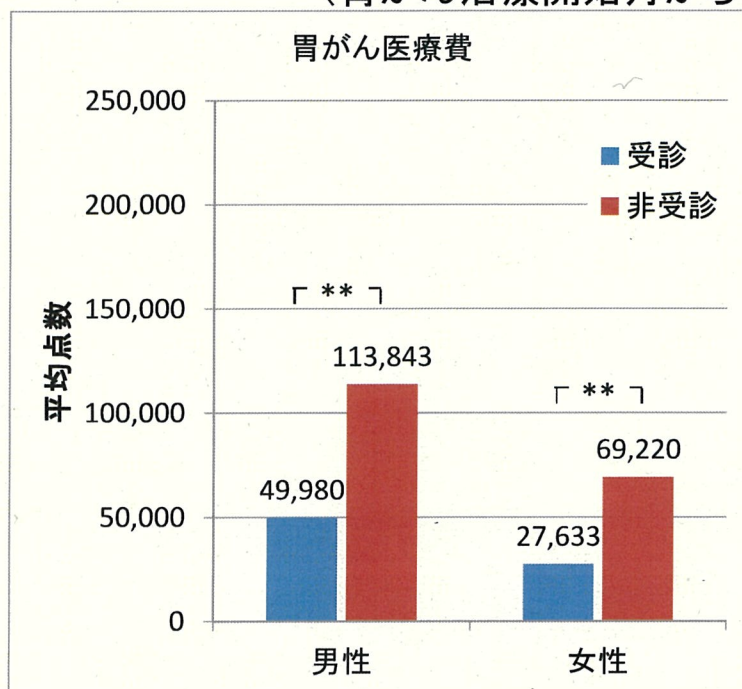
	受診		非受診		計	
	対象者数	平均年齢	対象者数	平均年齢	対象者数	平均年齢
男性	137人	53.1歳	211人	58.9歳	348人	56.6歳
女性	60人	52.0歳	148人	56.2歳	208人	55.0歳
計	197人	52.8歳	359人	57.8歳	556人	56.0歳

- 抽出の結果、合計で556人が分析対象として抽出された。
- 男女別では、男性は348人（平均年齢56.6歳）、女性は208人（平均年齢55.0歳）と推計された。このうち、胃がん検診受診者は男性137人（男性の39.4%）、女性は60人（女性の28.8%）であった。

結 果

男性の胃がん医療費では、がん検診受診群で平均約50万円に対して、非受診群では約114万円と高く、総医療費でも同様の傾向がみられ、男性では胃がん医療費、総医療費とも、女性では胃がん医療費で有意差($p < 0.01$)があると推計された。

主傷病により胃がん患者を特定した集計結果
(胃がん治療開始月から1年間の胃がん及び総医療費)



*: $p < 0.05$, **: $p < 0.01$

考 察

- がん検診受診群の胃がん治療開始から1年間の胃がん医療費は、非受診群に比べて有意に低いと推計されたことから、胃がん検診が胃がんの早期発見・早期治療に貢献し医療費適正化に効果があることが示唆された。
- ただし、今回の抽出方法(主傷病による集計)により特定した新規胃がん発症者の中には、精密検査のみ受診し実際は胃がんではなかった「胃がん疑い者」も含まれると推測される。特に胃がん検診受診群に多く含まれていると考えられ、その影響により一人当たり医療費が引き下げられている可能性がある。

考 察

- 「胃がん疑い者」を除外するため、当分析対象者のうち男性のレセプトデータから、日本胃癌学会の胃癌治療ガイドライン第4版を用いて、胃がん特有の診療行為・医薬品コード(※)を含むレセプトがある者を「真の胃がん発症者」として追加分析を行った。
- 「真の胃がん発症者」として抽出された119人を対象に、胃がん検診受診群と非受診群の一人当たり医療費を比較した。

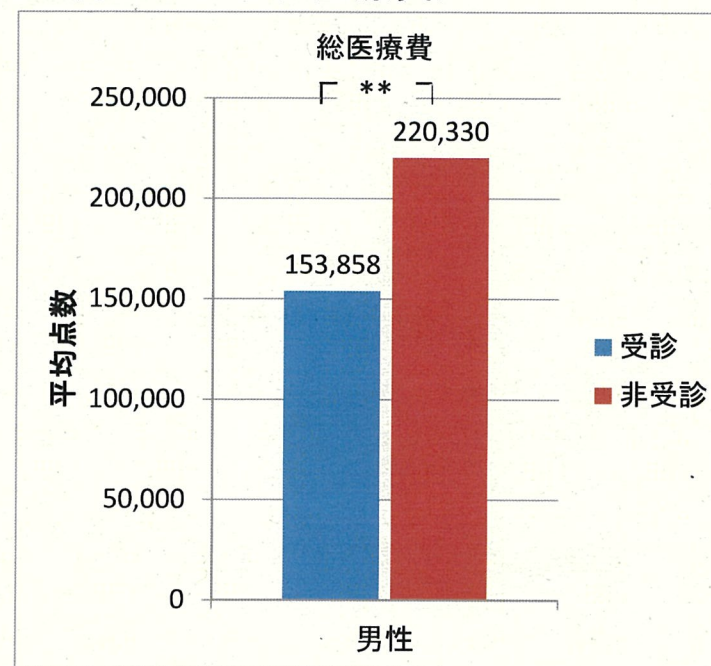
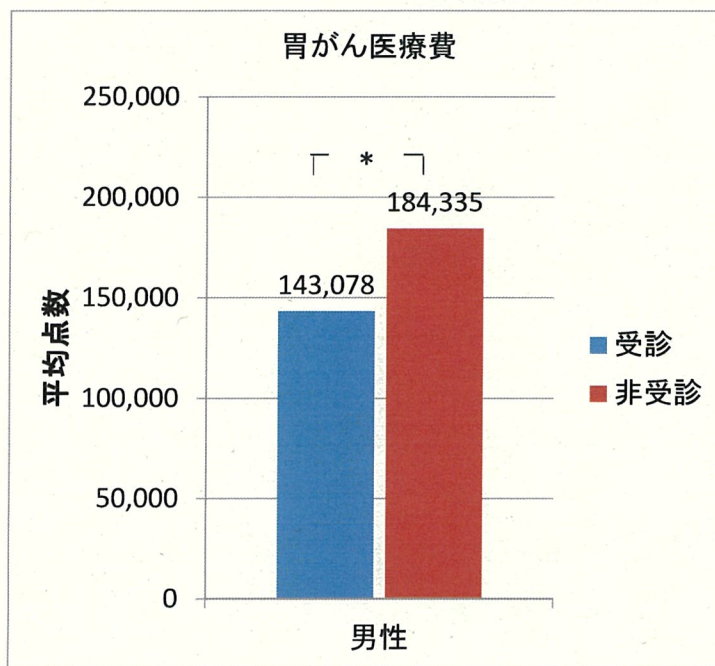
	受診		非受診		計	
	対象者数	平均年齢	対象者数	平均年齢	対象者数	平均年齢
男性	34人	57.6歳	85人	60.4歳	119人	59.6歳

(※)【診療行為】胃癌除術(単純切除術)等、【医薬品】シスプラチン注10mg等

考 察

胃がん医療費、総医療費ともにがん検診受診群と比べ非受診群の医療費が高く、有意差があると推計された。

胃がん特有の診療行為・医薬品の使用実績により胃がん患者を特定した集計結果
(胃がん治療開始月から1年間の胃がん及び総医療費)



*: $p < 0.05$, **: $p < 0.01$

考 察

- 「真の胃がん患者」による分析でも、がん検診受診群は非受診群に比べて医療費が有意に低く、胃がん検診が胃がんの早期発見・早期治療に貢献し医療費適正化に効果があることが示唆された。
- 主傷病による胃がん患者の特定方法と合わせて、胃がん特有の診療行為・医薬品の使用実績から「新規胃がん発症者」を特定することで、胃がん疑い者を除外することが可能であることが明らかになった。
- また、主傷病のみによる集計では「胃がん疑い者」が含まれると考えられ、正確な胃がん患者の把握は困難であることが明らかになった。

本研究の課題

- 今回の分析は協会けんぽのがん検診受診の有無のみを考慮しており、協会けんぽ以外で受診したがん検診は考慮していない。
- 検定の際の年齢調整は実施していない。
- 新規胃がん発症から1年以内に死亡した者(42名)が含まれており、これらの患者の影響については詳細な分析が必要。